

挑む

モノづくり ヒトづくり

— 空気輸送装置などは工場内の材料供給を担う重要な部分です。設計で大事なことは。

「当社が扱う粉粒体は、小麦粉、樹脂ペレット、酸化チタンなど多岐にわたる。粉や粒は硬さや成分、大きさ、温度の少しの変化で特性も変わるが、それに対応した信頼性のある機械づくりをしている。近年は電気自動車（EV）の電池

フルード工業（東京都文京区）は、空気輸送装置やロータリーバルブなど粉粒体の輸送や供給、排出、流事故は異物混入が原因の自動化、分離を担う機器を開発、提供している。底流には、創業から50年以上培った流体に粉や粒が混ざった状態の「混相流体」を扱う技術力がある。4月に創業者の故鈴木一大氏からバトンを受け継いだ明珍裕之社長に機械づくりの考え方を聞いた。

（熊川京花）

「当社の強みの一つに営業の提案力がある。顧客の要望をよく聞いて、最適な提案ができるよう心がけて

いる。顧客は希望の作業に對してオーバースペックが必要だと思いついている場合も多い」

— 人材育成はどのように行っていますか。

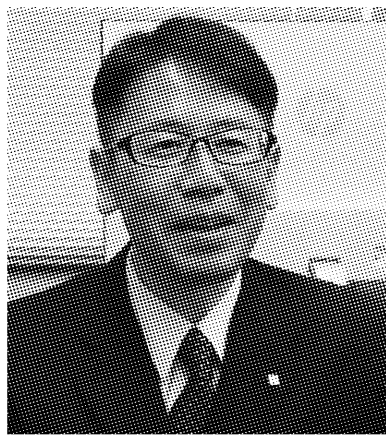
「自社製品に触れる機会を多く設けている。新製品が出た場合は技術職が説明する。教えることが好きな社員が多く、部署間の垣根も低い。技術職に関しては先輩によるほぼマンツーマンの指導がある。新入社員でも新製品開発に携われるため、設計好きにはたまらない環境だと思う」

— つくばテクノセンター（茨城県つくばみらい市）では研究開発を進めています。

「現在の機器や装置の初期設計は、混相流体技術の未解明な部分が多かった創業者の時代が基で、安全を重視しておりマージンが大きい。粉粒体のエネルギー論を踏まえつつ、実験と検証を重ねて低電力消費でも機能性と安全性を維持できるラインを探っている」

— 今後の展望は。

「コロナ禍もあり、現在の売り上げは横ばいだが、新製品開発、加工を担う協力工場の拡充、社内の効率化を進めて成長を目指す」



フルード工業社長
明珍 裕之氏

混相流体、低電力で機能的なライン探る